

ローマの信徒への手紙 4 章

4:1 では、肉によるわたしたちの先祖アブラハムは何を得たと言うべきでしょうか。

4:2 もし、彼が行いによって義とされたのであれば、誇ってもよいが、神の前ではそれはできません。

4:3 聖書には何と書いてありますか。「アブラハムは神を信じた。それが、彼の義と認められた」とあります。

4:4 ところで、働く者に対する報酬は恵みではなく、当然支払われるべきものと見なされています。

4:5 しかし、不信心な者を義とされる方を信じる人は、働きがなくても、その信仰が義と認められます。

++++

パウロは前の章で「ユダヤ人」でも「異邦人でも」イエス・キリストに対する信仰によって

「救い」にあずかることができると語りました。つまり、行いによるのではなく、信仰によって救いは届くというのです。

そして、その実例としてユダヤ人なら知らない人はいないユダヤ人の始まりの人

「アブラハム」を引き合いに出して「アブラハムは信じた。主はそれを彼の義と認められた」という言葉から説明しています。

1) アブラハムという人

ユダヤ人民族にとってアブラハムは父祖と呼ばれています。彼がユダヤ人の祖先となったからです。

そして、彼の人生の中ではいくつかの大きな転機がありました。

創世記 12 章にその記録がはじまります。

神様からの召命を受けるのです。

12:1 主はアブラムに言われた。「あなたは生まれ故郷父の家を離れてわたしが示す地に行きなさい。

12:2 わたしはあなたを大いなる国民にしあなたを祝福し、あなたの名を高める祝福の源となるように。

12:3 あなたを祝福する人をわたしは祝福しあなたを呪う者をわたしは呪う。地上の氏族はすべてあなたによって祝福に入る。」

12:4 アブラムは、主の言葉に従って旅立った。ロトも共に行った。アブラムは、ハランを出発したとき七十五歳であった。

そしてこの約束は何度も繰り返し神様から語られます。

そして彼らは旅立ちますが、アブラハムはいくつかの失敗をし、また重要な選択を迫られます。

戦いに巻き込まれたりもします。

戦いには勝利し、少し報復を恐れつつ、時間だけが過ぎ、なかなか子供も生まれず、自分たちには子孫は残せないのではないかと失望し、恐れます。当時の名前はまだアブラムと呼ばれています。のちに名前がアブラハムに変わります。

そういう背景の言葉がローマの信徒への手紙 4 章に出てくる言葉でもあります。

創世記 15 章

15:1 これらのことの後で、主の言葉が幻の中でアブラムに臨んだ。「恐れるな、アブラムよ。わたしはあなたの盾である。あなたの受ける報いは非常に大きいであろう。」

15:2 アブラムは尋ねた。「わが神、主よ。わたしに何をくださるというのですか。わたしには子供がありません。

家を継ぐのはダマスコのエリエゼルです。」

15:3 アブラムは言葉をついだ。「御覧のとおり、あなたはわたしに子孫を与えてくださりませんでしたから、家の僕が跡を継ぐことになっています。」

15:4 見よ、主の言葉があった。「その者があなたの跡を継ぐのではなく、あなたから生まれる者が跡を継ぐ。」

15:5 主は彼を外に連れ出して言われた。「天を仰いで、星を数えることができるなら、数えてみるがよい。」そして言われた。「あなたの子孫はこのようになる。」

15:6 アブラムは主を信じた。主はそれを彼の義と認められた。

2) 「義とされる」とは

聖書における「義」とは何よりも「神様とまっすぐにつながった関係を生きること」を意味しています。

そして、信じることと義とされるということの関係についてここでは教えられています。

「15:6 アブラムは主を信じた。主はそれを彼の義と認められた。」とあるからです。

「アブラハムは主を信じた」とありますが、この言葉は字義通り訳すと

「(彼は)自分自身を確かにした/主の中で」という意味になっています。

それは「創造主である主の偉大さを認め、その憐みの中で自らを確かにした、真っ直ぐに立った」という意味になります。

そこには「自力で義とされた」という発想はありません。100% 神の愛に取り囲まれている中で「自らを確かにした」

それで主は彼とまっすぐの関係になったことを認めたというのです。

そういう神との関係の外にいるなら、私たちは常に「罪の中に」いるのです。

罪ある私たちは自分自身を神の前に申告する場合でも「的外れ」になっていることが多いのです。

何かを隠し、どこかにプライドを持ち、神様なんてどうせ・・・という意識を持ちやすいのです。

神様がいるなら、なんでそんなことが起こるのですがという怒りとか、反感とか、それらをもったまま包み隠さず、神様のまえに「主よ、こういうわたしです。あなたの憐みの中に自らを託します」と申告すること。

それが「主を信じる」ということにつながるのです。

「イエス様、私を、この私全部を憐んでください」と心から言えたとき「主を信じた」という状況となるのでしょ

うでしょう。要するにアブラハムは自分自身の存在をそのまま神様の呼びかけに応じ、そのお方の憐み深い呼びかけに応答したのです。

何も隠すところをもたず、自分のありのまま、そのままを神の前に差し出すように、大きな神の憐みにそのままの自分を託したのです。それによって神は彼とまっすぐの関係を持ったのです。

アブラハムが「憐み深い主に応答し、まっすぐに神様とつながった」それが「義」と認められるという意味です。

これは患者さんが信頼するお医者さんの前に座ってあれこれ病状を報告するのと似ています。

まだ病気が治っていなくても気分が随分楽になり、安心できます。

真っ直ぐに立つ、とは、そういう状況と似ています。だからと言ってアブラハムがもはや罪を犯さない完成された人間になったというわけではありません。

この出来事の後、アブラハムは大失敗を犯します。しかし、それでも「義と認められた」という関係は切れることがなかったのです。

それはアブラハムの行いの結果、義と認められたわけではないからです。

アブラハムは「神からの気づきを得たのです。

気づきとは、気がどこかからかやってきてくつつくことを意味していると言われています。